

12月10日

Copyright: Takumin

ロックモンテスキューが他においては個人の自由が重視される。他者から干渉されない自由を何よりも重視する。個人の領域権利、自由を何よりも重視し、それを保証してもらうために政治権力を立ち上げることになる。政治社会の存在理由は個人の権利の保全ということになる。個人の自由は不可侵の権利として想定される。それに対してルソーがたは一応個人的な自由から出発するが単なる個人の自由ではない。個人の中に二つの意思があると想定される。個別意志と一般意思。ルソーの考えでは本当の意思である一般意思を実現することが人間の目標である。よって集合的な概念へと変容していく。なぜそうなるかのプロセスを見ていく。ルソーの重視していた自由は真の自由が尊重されることであるが、意志に力点を置かれるのが特徴である。個人の意思が重要。意思を集めることによって社会の意思、政治の意思を創造するという風に彼は考える。最終的には個人から出発して社会の意思、政治の意思、国民の意思が形成され、それが上から国民に与えられる。自由を強制される。自由を、一般意思を自分の意思とみなす、ないし強制されることによって国民は真の自由を獲得することになる。この変化を人間改造論と説明する人もいる。人間と自由が変容することによって真の自由、解放が可能になるとルソーは考える。これは下手をすると全体主義的な理論へ横滑りすることになる。なぜなら全体の意思が重要視され、個人に強制されるわけだから、個人の私的な意思、自由より社会の意思が優先的に配慮されるからである。そうすると個々の領域が全体に解消される。さらにルソーの場合は全ての市民が立法過程にサインすることを前提としていたが、フランス革命の主役たちはルソーの理論と代表性理論を接合しようとした。当時18世紀末のフランスで直接民主制を実現することが不可能であったためである。すると代表者というマイノリティーが一般意思を体現するというロジックが帰結することになる。代議士が国会で一般意思を創設することになり、それにより国民が自由になると考えられた。ロジックとしては一貫して矛盾が含まれておらず、ルソー主義者は正義を実現しようとした。彼らから見れば英米のモデルは表層的で卑俗なシステムということになる。私的な利益ばかり追求するのは下品だとみなした。それが逸脱していくと全体主義のロジックに変わっていく。正義の名において自由が強制されることになるからである。恐怖政治のロジックを抑えていく必要がある。最終的にはマイノリティーがマジョリティーを正義と一般意思の名において支配していくことになる。彼らが着目した概念は徳(バーチュ)である。人間は社会契約によって道徳的な存在になる。有徳な市民が政治に参加することによって一般意思が生じる。その意志に従うことで市民は有徳でありつづける。ジャクバン派はたいていの人は有徳ではないと主張する。ということで少数の有徳なリーダーたちが全国民に代わって法を作り、支配せねばならないと主張するようになる。要するに自分たちは何が真の自由で何が一般意思であるかを認識できると主張し、大半の人間は腐敗しているので自分たちの真の意思を認識できない。だからマイノリティーの有徳な人たちが大半の国民に代わって強制していかねばならない。これがジャクバンの全体主義の主張。人間そのものを改造しようとするのだからプライベートの領域は認められない。ルソーは全体主義を想定していない。彼が生きた18世紀後半のフランスでは20世紀に起こるようなことは想像できなかったであろう。しかし彼のロジックが様々に曲解されることによって全体主義的な論理が完成されることになる。

それに対してアメリカイギリスの論理はレベルが高くないし、一貫性がない。そもそも権力を分立することを容認するからである。これはルソー主義者に言わせるとんでもない不正な行為だということになる。なぜなら正しいものを彼らは分割し、制限しようとするからである。正義を制限する理由なんてないはずであると考えが、アメリカイギリスはリーダーが有徳であっても彼らの権力を制限せねばならないとする。しかも分割せねばならない。それくらい人間を悲観的に見ている。そのためリベラル派にとってのスローガンは権力は腐敗し、絶対的な権力は絶対的に腐敗するというものであり、権力は常にチェックせねばならないものである。ただ皮肉なのはルソー派の方が理論は一貫していて正しいにもかかわらず、アメリカ・イギリスの制度の方が効果的に市民的自由を保障することになる。これを論理的に説明することは不可能である。このことが 20 世紀の経験を通じて明らかになる。ルソーはロジックの重視し、アメリカイギリスは現象のパターンを重視していたものであった。社会を分析するとなぜだかそうなるという現象のパターンを発見し制度化していくモデル。三権を分立するとより効果的に個人の自由を守ることができるという現象に着目するのである。そういう理論を最初に考え出したのがモンテスキューというフランスの思想家。彼は法の精神という本を書いたが、イギリスの政史を研究することで事象を考えた。彼は政治的自由は制限政体のみに見出される。しかしおよそ権力を有する者が権力を乱用することは歴史の語るところである。制限に出会うまで彼らは進む。信じられないことだが徳でさえ制限を必要とするのである。と主張した。そこから制限という概念が出てくる。ではどのように制限するのかというのが次の課題となる。大陸系でも権力の制限が考えられた。君主は絶対的な権力を有し、それが恣意化しないためにアドバイザーを活用するというのが彼らの結論であった。それが無制限的主権のロジックとなる。アドバイスというのは単なる言葉にすぎない。権力側に存在する、あるいは権力と一体化した言葉にすぎない。主権に対する制度的チェックが存在しなかったので王様はアドバイスを無視することができたのでチェックの機能は弱かった。それに対してアメリカイギリスの方は分割が必要であると考えた。分割とは単なる言葉によって制限するのではなくて、権力を別の権力によってチェック・制限するということである。最終的にどこに最終的なけつて県があるのかなど様々な問題が生じることになるが、権力は危険だから権力を分割するためには別の権力が必要であるとモンテスキューは考えた。一貫性を犠牲にしてでも権力を分割する必要があるとモンテスキューは考え、これがリベラルの考えの基礎となる。ただしモンテスキューはルソー以前の 18 世紀の人間である。彼はフランス革命後の世界を知らない。革命が起こることはあり得ないと考えていた。当時存在していた王制を前提としながら様々な適用可能な理論を提示することになる。よって限界がある。シビルソサエティー論というのがある。国家は絶大な権力を有しており、国民はバラバラな個人からなり、微々たる力しかない。国家と国民は対等に戦うことができないからシビルソサエティーという中間の共同体を作り、主体的に社会を作っていく必要がある。それが王権を抑制する考えた。一般の個人や市民では王権を制限できず、制限できるのは中間団体という権力である。その中間団体とは当時であれば貴族であった。貴族がいなくなると国家は専制化すると彼らは考えた。個人は権力によって押しつぶされてしまうと彼は考えた。ではなぜ貴族は権力を持っているのか。貴族は土地を持っているからである。そこから収入が得られ、しかも様々な特権を有してい

る。王から独立して存在することが可能なのである。これが封建主義のロジック。貴族は兵隊を持っていた。軍事力は王に集中しておらず、戦争の時はいちいち貴族に頼まねばならなかった。よって貴族は王の権力を抑止した。ルイ 14 世の時代に封建制は破壊される。彼は絶対君主で貴族から軍事力や特権を取り上げた。お城も破壊していった。それによって中央集権国家を作った。官僚を使って中央から周辺、全国を支配しようとした。まさに近代国家の原型である。そのプロセスにおいてベルサイユ宮殿を作ることになる。この宮殿は単なる館ではない。貴族が住む部屋が沢山あった。今まではフランスの各地に貴族が居を構えていたが、その貴族たちがみなベルサイユに集められた。今までは戦死であった貴族たちが宮廷貴族に変わっていった。そこから宮廷文化が花開く。彼らは王に台頭する権力を失うことになる。そうすると中間団体がなくなる。ただ一定の特権は貴族も持っていた。例えば貴族は税金を納める必要がなかったりした。ともかく王権が絶大化し、社会が水平化・平等化していった。

(王－貴族・国民)このモデルを批判するためにモンテスキューは法の精神を書いた。権力を分立しようとするわけだが、この時代に王権を分立することは不可能であった。では貴族の何によって権力を制限するのか。それが貴族の名誉心・プライドである。貴族は騎士道を貫き、名誉を保持するべきだと考えた。そのためには封建制の復活が必要であるとモンテスキューは考えた。貴族には名誉心があり軍人であって戦場で死ぬというのが名誉であるという考えがある。それに対して一般の徴兵された兵士は家族や私的な幸福の方が重要であった。そういうメンタリティーがないと権力を抑制できないというのがモンテスキューの考え。この理論は現在では通用しない。フランス革命が起き、貴族性が廃止され人民が主権者となる。そうすると権力が一か所に集中してしまう。この問題を解消するためには NGO の存在や権力の分立がなければならない。こういったロジック・モンテスキュー的モデルを主張することでリベラル派はルソー派を批判した。その際に重要になるのは権力観そのものも変わったということ。それをバンジャマンコンサンの理論に依拠して説明する。彼はルソー的な権力論を次のように批判した。権力には二種類ある。法的な権力と実際の権力。権力が政治社会において不可欠であるのは万人が民止めることである。個々人あるいは社会の権利を擁護するためには権力が必要である。問題はどのような権力がどの程度必要であるのかということ。絶対主義、あるいはルソー主義の権力観は無制限的であればならないから最大限の権力を社会で実現せねばならないと考え、それによって秩序を形成し国民の権利を保全すると考えた。彼らはこれを中途半端にしてはいけないと考えた。実際の権力が制限すると秩序を維持できないと考えたためである。だから平和と秩序を実現するためには絶対的な権力が必要であると訴えた。それがきっかけで宗教戦争や絶対主義が起こった。問題は絶対的な権力を実現、しかも正しい権力に変えることであった。この論理が正しいとするとリベラルの人たちは必ず議論に負けることになる。無制限的主権の理論を論駁するためには別のロジックを持ってこなければならない。近さんは次のように展開した。権力を極大化しようとした場合、実質的な権力は弱まる。社会にとって最大限の権力を実質的に実現するためには制度上の権力を制限する必要があると主張した。(比例を直線ではなくて曲線で考えた。)こちらが正しいということになれば権利を制限することでより大きな権利を得ることができ、より自由や権利が保障されるということになる。

どっちのモデルが正しいのか？ここで権力とは何かをもう一度考える必要がある。権力の淵源とは世論、あるいは同意である。我々が主観的に服従するというメンタリティーが権力の淵源。政治権力とは最初からお存在ではなく、人間は同意によって主体的に作り上げるもの。ほとんどの人はなんとなく従ってるだけだが、そのなんとなくが重要。どういふオピニオンが重要か。先ほどのモデルでは君主に絶対的な権力があると国民の人が何となくそう思った場合、そう思うが故に絶対的な権力が帰結する。国民の人権は侵害されてもいい、それくらい権力を与えねばならないと国民が思えば権力が獲得できる。そうすると先ほどの図式が正しくなる。人権より権威がいいという考えが強まるとこうなる。では後者のモデルはどのように正しいか。栄光や権力よりも個人の自由が重要であると大半の人が考えている時に正しい。国が人権を尊重してる時に最も政治が国民に支持される。支持されるということは権力を獲得できる。よってこの時に実際の権力は極大化する。権力が絶対的になると人権を侵害する権力はやだと国民が考えた時に支持が低下することにより実際の権力は低下する。よって人々のオピニオンの性質によってどちらの権力観が正しいかが決まる。コンスタンは近代人の精神は後者であるとして全体主義の方を批判する。